

新自由主義 (1)

第一部 自由主義と集産主義

第一章 自由主義陣営からの反撃

吉 澤 昌 恭

目 次

I 自由主義のルネッサンス

- (1) 自由主義の没落
- (2) 新自由主義の諸系譜
- (3) 自由の将来

II 反集産主義としての新自由主義

- (1) 市場の擁護
- (2) 中央管理経済か、市場経済か
- (3) ミーゼス、ハイエク、オイケン、レブケ

I 自由主義のルネッサンス

(1) 自由主義の没落

17世紀後半から、19世紀にかけて花開いていった自由主義の体制は、1870年代を境にして大きく変貌し始めた。社会改良の思想に基づく国家の経済への干渉が始まった。こうした動きは、第一次大戦、ニュー・ディール政策、第二次大戦といった大事件を経て更に進展した。一方でロシアに於いて、他方でドイツやイタリアに於いて全体主義の体制が出現した。ナチス・ドイツやファシスト・イタリアは崩壊したが、上述の趨勢は今日でも続いている。そして、今や西側の自由主義陣営に属すると考えられている。

る国々ですら厳密な意味で自由主義体制と呼び得るかどうか、疑わしいものとなっている。

こうした現実の体制の変質に先立って、既に18世紀半ば頃から社会思想の潮流に変化が現われ始めていた。19世紀から20世紀にかけての変転は、それに先立つ思想潮流の動きを反映したものであった、とすることができるだろう。18世紀後半から20世紀にかけての時期は自由主義思想の後退の時代であった。こうして、「第一次大戦の終結時には、自由主義の精神的伝統はほとんど死滅してしまった。……もはや、若者の想像力を燃え上がらせることのできる自由主義思想の生き生きした世界は存在しなくなっていた。」⁽¹⁾

こうした展開は、英国が第二次大戦後、労働党政権の下、社会主義的実験に突入した時にピークに達した。⁽²⁾しかしながら、社会主義思想と、それに鼓舞された社会改良の努力とが頂点に達する以前に、既に思想界に於いて新たな動きが起っていた。

(2) 新自由主義の諸系譜

幾つかの国々で、一握りの少数者によってではあるが、そしてまた、それぞれ別個に他者から独立してではあるが、自由主義の精神的伝統を再興しようとの努力が行われ始めていた。⁽³⁾まず第一に、英国ではエドウィン・キャナン (Edwin Cannan) がそれを始めた。そして、ロンドン・スクール・オブ・エコノミクスでの彼の生徒達がそれを引継いだ。彼らの内でとりわけ大きな影響力を持ったのは、サー・テオドール・グレゴリ (Sir Theodore Gregory), ライオネル・ロビンズ (Lionel Robbins), サー・ア

(1) Hayek, F. A.: The Transmission of the Ideals of Economic Freedom, in: *SPPE*, p. 195.

(2) ハイエクは、1848年の革命から1948年頃までの一世紀をヨーロッパ社会主義の世紀と呼んでいる。Hayek, F. A.: The Decline of Socialism and the Rise of the Welfare State, in: *CL*, p. 253.

(3) Hayek, F. A.: The Transmission of the Ideals of Economic Freedom, in: *SPPE*.

ーノルド・プラント (Sir Arnold Plant) であり、そして、F. C. ベンハム (Benham), W. H. ハット (Hutt), F. W. ペイシュ (Paish) であった。

第二に、オーストリア人によっても同様の試みが為されていた。ルドヴィヒ・フォン・ミーゼス (Ludwig von Mises) 並びに、彼の親密な弟子達、ゴットフリート・ハーバラー (Gottfried Haberler), フリッツ・マハルプ (Fritz Machlup), F. A. フォン・ハイエク (F. A. von Hayek) がそれである。

第三のグループはシカゴ大学に生まれた。フランク・H. ナイト (Frank H. Knight) に始まり、ヘンリー・C. サイモンズ (Henry C. Simons), アーロン・ディレクトール (Aaron Director) を経て、ジョージ・スティグラー (George Stigler), ミルトン・フリードマン (Milton Friedman) へと到る系譜が存在する。

第四に、大統領にもなったイタリア人学者エイナウディ (L. Einaudi) がいる。

そして最後に、ドイツ人のグループを挙げることができる。このグループはワルター・オイケン (Walter Eucken) やヴィルヘルム・レプケ (Wilhelm Röpke) を中心としており、別名フライブルグ学派とも呼ばれている。

(3) 自由の将来

以上のような人々によってそれぞれ別個に行われていた研究・教育活動は、第二次大戦後彼らの相互交流を通じて、大きく発展した。こうした相互交流を大いに促進したのが、「モンペルラン協会」(Mont Pèlerin Society) であり、年報『オルド』(ORDO) である。既に1951年に、ハイエクは次のように述べている。「過去四年世紀が経過する中で登場してきたこれらのグループの全ては、第二次大戦が終わるまでは、お互いに真に知り合うことはなかった。我々はその後生き生きした思想の交換を目撃した。……わずかばかり残った自由主義者がそれぞれ、ひとり寂しくまた笑いのにされながら、己れ自身の道を歩む時代は過ぎ去った。彼らが若者の間

に何らの反応をも見い出さない時代は過ぎ去った。……30年前には、自由主義は尚も公人に何らかの影響を及ぼしたかもしれない。しかし自由主義は、精神的運動としては、ほとんど消滅してしまっていた。今日それの実践への影響力はわずかなものであるかもしれないが、その問題は今一度思想の生き生きした構成体となった。我々は、自由主義の未来に新たな信頼が寄せられることを期待してもよいのかもしれない。」⁽⁴⁾

ハイエクが以上のように述べてから、既に30年がたった。この間自由主義思想は再び勢いをもち返してきた。そして、この傾向はここ数年来特に顕著である。東側での実態が明らかになってきたことが何よりもそのことに大きく寄与した、ということに疑問の余地はない。しかし、それと同時に西側に於いても変化のきざしが認められる。ケインズ経済学の限界、福祉国家の限界といったことが言われ出して既にかかなりの年月がたつ。こうして再び、自由主義思想が脚光を浴びるようになってきたのである。

Ⅱ 反集産主義としての新自由主義

(1) 市場の擁護

前節に挙げた人々は、一般に新自由主義という名称で総称されている。しかし、彼らの主張は、必ずしも全ての点で一致しているわけではない。例えば、「資本主義」という用語に対する態度ひとつをとってみても、その差異は明らかである。ミーゼスやフリードマンは、「資本主義」という用語をむしろ誇らしげに用いている。彼らは、資本主義を良いものとして受け止めている。それに対して、オイケンやレプケには、この用語をできる限り使用しないようにしようとする傾向が認められる。彼らがそうするには、少なくとも二つの理由がある。まず第一に、それは手垢にまみれた用語である。それは、それぞれ立場を異にする人々の思い入れと、様々なイデオロギーのしみついた言葉であり、科学的な議論には全く耐え得ない用

(4) Hayek, F. A.: The Transmission of the Ideals of Economic Freedom, in: *SPPE*, p. 200.

語である。こうした理由から、オイケンやレプケは、「資本主義」という用語の使用を回避して、その代りに、「経済秩序」(Wirtschaftsordnung)や「経済体制」(Wirtschaftssystem)という用語を用いている。しかし、彼らがこうするのにはいまひとつの理由が存在する。一般に「資本主義」という用語を冠せられる時代を、彼らは必ずしも全面的に肯定しているわけではないのである。この点は、ミーゼスやフリードマンと対照的である。オイケンやレプケは、社会主義や、或いは集産主義を批判すると同時に、資本主義をも痛烈に批判するのである。

以上の如き極端な二つの立場の間には、正に、「資本主義」という用語に対する種々様々な態度が認められる。

一般に新自由主義者と呼ばれている人々の主張を詳細に吟味してゆくならば、そこに幾多の相違点を見い出すことができる。

しかしながら、少なくとも次の一点に於いて彼らの主張は全て一致している。即ち、分業に基礎を置く大規模社会は、市場機構なくしては、合理的なものたり得ない、というのが彼ら新自由主義者全ての一致した考え方なのである。

(2) 中央管理経済か、市場経済か

分業に基礎を置く大規模社会に於いて、経済諸量がいかにして調整されるか、という問題に最も精力的に取り組んだのが、ミーゼスであり、オイケンであった。

その解答をミーゼスは、「中央政府の計画か、個人の計画か」という形で定式化した。即ち、資源配分に関する決定は、全てが中央で下されるか、さもなくば、市場機構の提示する財の稀少性の尺度（即ち、価格）に基づいて各経済主体によって下されるか、のいずれかでしか有り得ず、両者の中間項は、資源配分という観点からすれば、前二者のいずれよりも劣悪なものとなるのである。

オイケンもやはり同様の結論に達した。彼の場合には、それは、「中央管理経済 (Zentralverwaltungswirtschaft) か、流通経済 (Verkehrswirts-

chaft) か」という形で定式化された。

資源配分を合理的に遂行し得るためには、論理的には、中央管理経済か市場経済のいずれかを選択するしかない、というのが新自由主義者の共通認識である。両者の中間のもの、即ち、市場経済への国家の部分的な干渉は、やがて、中央管理経済を帰結するか、或いはそこまでいかなくとも、混乱を生み出すに過ぎない、とも考えられている。

新自由主義者は、中央管理経済も、市場経済への国家の部分的な干渉のいずれをも非難する。他方、彼らは、非市場経済を、集産主義 (collectivism) という用語で表現しようとする傾向を持っている。こういった意味で、新自由主義とは、集産主義に反対する人々の総称であると言えるかもしれない。

(3) ミーゼス、ハイエク、オイケン、レプケ

集産主義への反撃という観点から新自由主義を把えるならば、最も大きな影響力を持つのは、ミーゼス、ハイエク、オイケン、レプケの四名であろう。彼らこそ、市場擁護・反集産主義の運動の最も重要な中心人物であったし、また、現在もそうである。第一部の以下の章では、彼ら四名の主張を比較考量しながら、新自由主義者達の集産主義批判がどのようなものであるのか、を明らかにすることに努めたい。まず、次章では、集産主義の体制が何故に出現したのか、自由主義思想が何故に衰退してしまったのか、という問題が論じられる。そして第三章で、集産主義がいかなる弊害を生み出しているか、即ち、新自由主義者達が集産主義をどのように批判しているのか、を論ずることにしたい。

反集産主義というネガティブな側面に於いては、一般に新自由主義者と呼ばれている人々の主張はほぼ一致している。しかし、集産主義を打倒した後にいかなる社会を構築すべきか、という所に議論が移ってゆくと、彼

(5) 中央管理経済は論理的には成立可能である。しかし、実践の段階になるとそれは十分機能しない。新自由主義者はこう考えており、これが、彼らが中央管理経済を批判する理由のひとつとなっている。詳しくは第三章で論ずる。

らの間にもかなりの意見の食い違いが認められる。現代社会に於いて市場機構は必要不可欠なものである、という点で彼らの認識は一致している。しかしながら、それでは市場機構を維持してゆくために何らかの政策が必要でないのか否か、或いはまた、市場機構は社会全体の中でどのように位置づけられるべきか、といったことが問われるなら、これに対する新自由主義者の解答は微妙に食い違っている。即ち、事が政策に関わってくるや否や、一致点よりも相違点の方がより目立ってくる。第二部では、こうしたことを明らかにしてゆきたい。

しかしまず、新自由主義という名称で総称されている人々に共通するものが何であるのか、が明らかにされねばならない。こうした基礎作業を踏まえた後に於いて初めて、微妙な意見の相違を明らかにしてゆくという作業が実り多いものとなり得るであろう。

尚、本研究で参照・引用する、ミーゼス、ハイエク、オイケン、レブケの著作に関して以下の如き略記号を用いる。

Mises, L. von

- [1] Socialism: An Economic and Sociological Analysis, New Haven 1951 (Die Gemeinwirtschaft: Untersuchungen über den Sozialismus, Jena 1922)—*SESA*.
- [2] A Critique of Interventionism, N. Y. 1977 (Kritik des Interventionismus: Untersuchungen zur Wirtschaftspolitik und Wirtschaftsideologie der Gegenwart, Jena 1929)—*CI*.
- [3] Human Action: A Treatise on Economics, New Haven 1949, revised ed. 1963—*HA*.
- [4] Planning for Freedom and twelve other essays and addresses, South Holland, Illinois 1952, memorial ed. 1974—*PF*.
- [5] The Anti-Capitalistic Mentality, Princeton 1956—*ACM*.
- [6] 『自由への決断—今日と明日を思索するミーゼスの経済学』村田稔雄訳、広文社、昭和55年 (Economic Policy: Thoughts for Today and Tomorrow, South Bend, Indiana 1979)—『決断』

Hayek, F. A.

- [1] 『集産主義計画経済の理論—社会主義の可能性に関する批判的研究』〔編著〕迫間真治郎訳, 実業之日本社, 昭和25年 ([ed.] *Collectivist Economic Planning: Critical Studies on the Possibilities of Socialism*, London 1935)—『集産主義』
- [2] 『隷従への道』—谷藤一郎訳, 創元社, 昭和29年 (*The Road to Serfdom*, 1944)—『隷従』
- [3] *Individualism and Economic Order*, 1948, [Gateway Editions, Ltd., South Bend, Indiana]—*IEO*
- [4] 『科学による反革命—理性の濫用』佐藤茂行訳, 木鐸社, 昭和54年 (*The Counter-Revolution of Science: Studies on the Abuse of Reason*, Glencoe 1952)—『反革命』
- [5] *The Constitution of Liberty*, 1960, [Routledge & Kegan Paul, London 1960]—*CL*
- [6] *Studies in Philosophy, Politics and Economics*, 1967, [University of Chicago Press, 1967]—*SPPE*
- [7] *New Studies in Philosophy, Politics, Economics and the History of Ideas*, 1978, [Routledge & Kegan Paul, London 1978]—*NS*
- [8] *Law, Legislation and Liberty*, [Routledge & Kegan Paul, London, Vol. I: Rules and Order, 1973, Vol. II: The Mirage of Social Justice, 1976, Vol. III: The Political Order of a Free People, 1979]—*LLL*

Eucken, W.

- [1] 『国民経済学の基礎』大泉行雄訳, 勁草書房, 昭和38年 (*Die Grundlagen der Nationalökonomie*, Berlin-Göttingen-Heidelberg 1940)—『基礎』
- [2] 『経済政策原理』大野忠男訳, 勁草書房, 昭和42年 (*Grundsätze der Wirtschaftspolitik*, Tübingen 1952)—『原理』

Röpke, W.

- [1] *Die Gesellschaftskrisis der Gegenwart*, Bern-Stuttgart 1942, 6. Auflage 1979—*GKG*
- [2] 『ヒューマニズムの経済学—社会改革・経済改革の基本問題』喜多村浩訳, 勁草書房, 昭和37年 (*Civitas Humana: Grundfragen der Gesellschafts-und Wirtschaftsreform*, Erlenbach-Zürich 1944)—『ヒューマニズム』
- [3] *Internationale Ordnung-heute*, Bern-Stuttgart 1945, 3. Auflage 1979—*IO*

- [4] 『現代経済の危機』喜多村浩訳，青也書店，昭和24年（この書物に於いては，次の二論文が翻訳されている。①Die Krise des Kollektivismus, München 1947 ②Das Kulturideal des Liberalismus, Frankfurt am Main 1947)—『危機』
- [5] Die Ordnung der Wirtschaft, Frankfurt am Main 1948—*OW*
- [6] Maß und Mitte, Erlenbach-Zürich 1950—*MM*
- [7] Jenseits von Angebot und Nachfrage, Bern-Stuttgart 1958, 5. Auflage 1979—*JAN*